From 大阪

世界遺産の古墳群を学ぶ玄関「百舌鳥古墳群ビジターセンター」

8K映像のデジタルコンテンツのイメージ

2019年7月に「百舌鳥(もず)・古市(ふるいち)古墳群」が世界遺産に認定。2021年3月には、同古墳群を代表する仁徳(にんとく)天皇陵古墳の南側に「百舌鳥古墳群ビジターセンター」がオープンする。世界遺産認定までの経緯や、同センターで目玉の8K映像を使ったデジタルコンテンツについて尋ねた。

大阪初の世界遺産 百舌鳥・古市古墳群

大阪府の中西部、大阪湾に面する堺市。大阪市のベッドタウンであると同時に、世界に誇るものがある。それが“百舌鳥古墳群”だ。「戦後の復興開発で住宅が建てられ半数以上の古墳が破壊されましたが、かつては100基以上ありました」と語るのは、堺市文化観光局世界遺産課の泉谷博幸さん。

JRと南海電鉄の三国ケ丘駅近く約4km四方に、日本を代表する大小様々な古墳が点在し、古代国家の形成過程を今に物語る。中でも仁徳天皇陵古墳は、墳丘長486m、周囲2.85km、甲子園球場の12倍という圧巻の大きさだ。エジプトのピラミッドと中国の秦始皇帝陵と並び、世界三大墳墓にも数えられている。

そんな仁徳陵を活かした街作りの調査を、2004年に堺都市政策研究所がスタート。有識者から「百舌鳥古墳群と同時期に一体的に築造された古市古墳群と共に世界遺産を目指すべき」という指摘を受け、堺市だけでなく、古市古墳群を持つ羽曳野(はびきの)市と藤井寺市、さらに大阪府の4者で世界遺産登録を目指すように。そして、2013年から推薦書原案を文化庁に提出し、資産の絞り込みなどを行いながら、4回目の2016年にようやく国内推薦を獲得。ユネスコの諮問機関であるイコモスの現地調査を経て、2019年7月6日に世界遺産に登録され、研究所の調査開始から15年かけて念願を叶えた。

ビジターセンターが誕生 目玉の8K映像が話題

世界遺産に認定されるほどの稀有の資産価値を持つ「百舌鳥・古市古墳群」。その素晴らしさを伝えるガイダンス施設の1つとして、仁徳天皇陵古墳の南側に広がる大仙公園内に、2020年8月から約2億2千万円をかけて工事を始め、3月に完成するのが「百舌鳥古墳群ビジターセンター」だ。

上空から見た仁徳天皇陵古墳。百舌鳥古墳は44基、古市古墳群は45基の古墳が現存

堺市役所21階展望ロビーから望む仁徳天皇陵古墳

百舌鳥古墳群ビジターセンター俯瞰イメージ

百舌鳥古墳群ビジターセンター内部イメージ

堺市博物館の展示イメージ

床面積477.95㎡の平屋の造りと大きな施設ではないが、堺市出身の空間デザイナーの間宮吉彦氏がコンセプトデザインを提案した洒落た建物に、古墳群に関する展示のほか、観光案内や休憩などのコーナーも設けられる。

同局観光部観光企画課の弓場久稔さんによると、「現在はコロナ禍で一時的に減っていますが、世界遺産に登録されたことで観光客が2〜3倍になり、外国人の観光客も増えました。当センターは、古墳の前知識のない子どもや外国人の方々に、『そもそも古墳って何？』『古墳のすごさとは？』をわかりやすく伝える入門的な施設」なのだという。

同施設の目玉となる8K映像を使った無料のデジタルコンテンツは、ビジュアルを駆使して、誰もが古墳の素晴らしさを一目瞭然に理解できるよう工夫が凝らされている。その元となったのは、堺市博物館でバーチャルリアリティー（VR）を用いて、古墳群を上空から眺めたり、内部の石室に入ったりできる人気の疑似体験ツアーだ。惜しまれながら終了したのは、実はそのノウハウを受け継ぎ、よりバージョンアップしたこの施設ができたからである。

壁一面と床面を使った横幅14m、高さ3mの巨大スクリーンに、プロジェクションマッピングで大迫力かつリアルに古墳群を再現。年齢の制限や、多人数で一度に同じ臨場感を共有しづらいというVRのヘッドマウントの欠点を解消し、子連れのファミリーや友人、カップルが一緒に感動を分かち合えるようになった。さらに、上空から望む古墳群は、4Kの4倍の画素数を持つ話題の8K。「圧倒されるほどの精細感で、光の反射などもすごくリアルです」と弓場さんが興奮気味に教えてくれた。

古墳は地元住民の誇り 魅力的な街作りを目指す

デジタルコンテンツでは、古墳群の価値や雄大さだけでなく、古墳から始まる堺1600年の由緒ある歴史文化に触れる内容を盛り込んで、古墳と堺への興味を引き立てる。さらに深く学びたければ、同じ大仙公園内にある堺市博物館を訪れると良いだろう。この博物館は、入門編であるビジターセンターとセットで活用されることを位置付けており、同センターの誕生に併せて3月にリニューアル。1872年に仁徳天皇陵古墳の前方部から発見された石室の様子を描いた絵図を元に再現した石室や、宮内庁が所有する馬形埴輪片から復元したレプリカなど、新しい展示で注目を集めている。

2施設の見学を終えたら、ぜひ古墳群を訪ねて歩きたい。前方後円墳の独特の形を示すために上空から取り上げた画像が多いが、「昔の人が空を飛べたわけではありません。現地を歩いて古代人と同じ視点で、この地で生まれた古墳の雄大さと古代の王の権力の大きさを体感してほしい」と泉谷さん。

堺市の海岸沿いはかつて、この古墳群の近くにあり、海岸沿いの台地に数々の古墳を建造することで、この地を訪れる多くの使者に王の権力を見せつけたという。そんな歴史に思いを馳せれば、「百舌鳥・古市古墳群」の価値を一層感じられるだろう。

その誇りは地元住人にも受け継がれている。戦後の開発で古墳が破壊される一方で、守りたいと考える人々が自発的に組織を作り、情報発信やボランティアガイド、清掃などを実施し、今も活動を続けている。そんな地元の人々の思いと行動は、世界遺産認定でも高く評価された。

古墳をキーワードに、総合的なミュージアムや気球による遊覧体験などの構想もあり、観光推進と魅力的な街作りの両立を邁進する堺市。2020年12月には初の古墳サミットが大阪府下で開催された。今後も全国にその輪を広げ、かつての古代国家のように、連携を深めながら古墳を活かした街作りを牽引する。

取材・写真提供／堺市文化観光局